
目覚まし時計の見る夢

SHOW

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

田覚まし時計の見る夢

【著者名】

SHOW

【あらすじ】

田覚まし時計が夢を見るお話を。

例えば、今日の前にあるその景色。胸を突き刺すような、激しい優しさ。

「例えば」

彼はモスコミコールの入ったグラスを、たんづ、とカウンターで一ブルに叩き付けた。

目の前にいた店員が迷惑そうな顔でこちらを見ていたが、彼は全く気にする事なく、というよりは本当に気付いていなかつたのだろうが、ともかく話を続けた。

「俺達の体は六十兆からなる細胞で出来ている。そしてその細胞一つ一つはもつと細かい要素、つまり原子で出来ているわけだ」

僕の右隣の席に座つている彼は、グラスを両手でしつかりと包み込んでじっとそれを見つめている。

もしかしたら僕ではなく、そのモスコミコールの入ったグラスに話しかけているのかもしれないな、なんて事を思った。

「で、その原子はさらにいくつかの中性子や陽子、電子の集まりに過ぎない。俺の言いたい事、わかるか？」

彼がモスコミコールに尋ねる。だけどモスコミコールがそんな問い合わせられようはずもないで、代わりに僕が答えた。

「僕達の体は、つまりそういうモノの集まりに過ぎないって事か？」

わりと射た解答だと自分では思つたのだが、彼は漫画の主人公みたいに大げさなため息を一つ漏らしだけだった。

「俺達の体だけじゃない。この世に存在するもの全てが、そういう物質や電荷の集まりだって事だ。別に俺は、ここでお前に唯物論を説いて聞かせていいわけじゃないからな」

それはそれで唯物論とはちょっと違うような気もしたが、話の続

きが気になつたので僕は黙つてゐる事にした。彼の話は、特に酔つている時のそれは、馬鹿げているがそれなりに面白いのだ。

「でも、それが全てじゃない。物質が全てじゃないんだ。もう一つの大事な要素、現象が絡んでくる。うん。お前、量子力学の有名なエピソードを知つてゐるか？」

理系専門の彼が好きそうな話だな、なんて事は思つたものの、僕自身そんな難しい話はこれっぽっちも知らなかつたので黙つてゐた。彼はそれをその通りに解釈してくれたらしい。

「簡単に言うと、運動している素粒子を観測する場合、その位置と運動量を同時に知ることは原理的に不可能である、とまあこんなもんだな。つまり、そういう事だ」

さつぱりわからなかつた。

まず量子力学の有名なエピソードといつやつの中身が全く見えなかつたし、それ以前に、そもそもそいつが今までの話とどう結びついているのかさえ皆目見当も付かない。

だけど彼は自分の説明に満足したようで、モスコウコールを一口飲んだ後、うんうん、と小さくうなづいた。

僕もとりあえず、そうだな、なんて咳いたりしてみる。

「全ては物質であり、現象なんだよ。いや、そこに物質が存在しているという現象なんだ。この世界のどこにも確かなものなんてありはしない。そこにそれがある、という確率的な一つの現象の連續に過ぎないんだよ」

今まで誰にも言つた事のない秘密を打ち明けるように、彼は一気に吐き出した。誰にも明かした事のない世界の真理。そんなものを彼は一息に語つてみせたのだ。

「だけど、その現象を捕らえる受信機だけは、確かにここに存在する」

「ここに、といつ部分で彼は自らのこめかみを人差し指で二回ついた。

世界の真理を捉える受信機の存在。そんな演題の書かれた紙が、

僕の頭の片隅でひらひらと舞っていた。

「人体の機能なんてものは、結局のところ全てが脳に収束する。ほら、五感つてのがあるだろ。目で見て、耳で聞いて、鼻で臭いをかぎ、舌で味わい、触れて感じる。…そんなもの全て嘘つぱちだ！」

相当酔いが回ってきたのか、彼は急に語調を荒げた。

そのままの勢いで持つてているグラスをまたテーブルに叩き付けるかと思つたら、彼は逆にそのグラスを一気に空にした。そして、それをそつとコースターの上に置いた。

店員の言葉に、彼が首を横に振る。

「脳が見てるんだよ。脳が聞いて、脳が臭いを区別し、脳が味わい、脳が感じているんだ。脳が感知している電気的な刺激のパターン。目や耳なんものは、ただのアンテナだ。アンテナが情報を処理しているわけじゃない。アンテナにつながれた脳が、情報を処理しているんだ」

ま、そうだな。確かにその表現が正しいだろうな。そう言いながら僕もグラスを空にした。そしてもう一杯同じものを注文する。

僕の酒が来るのを待つてから、彼は話を続けた。

「こんな話がある。ある精神カウンセラーが実際にやつたものだ」ひと呼吸あいた後、本当の話だからな、と彼は付け加えた。

「まず、被験者に熱湯の入ったポットを見せる。まあ、ただ見せるだけだと本当に熱湯が入っているかどうかわからないから、それでホットのコーヒーなんかを入れて見せるんだ。次にその被験者の手をテーブルの上に置かせ、さらに目を閉じさせる。そしてその手にポットから熱湯を注ぐ…」

カウンターの上に無造作に乗せてあつた右手を彼に見られているような気がしたので、僕はそつとそれを引っ込んだ。

「被験者はその熱さでとっさに手を引く。見ると熱湯をかけられた部分は真っ赤になり、水ぶくれまでできている

酷いカウンセラーもいたものだ。そういう意味の事を彼に言つたが、彼はゆっくりと首を左右に振つた。

「そうじやないんだ。実はポットから熱湯を注がれたというのは、その被験者の思い込みだったんだよ。カウンセラーが手にかけたのは、そばに置いてあつた花瓶の水なんだ。ただの水をかけられただけなのに、水ぶくれができてしまったわけだ」

水だけにな、と彼は小さな声で呟いた。

自信がないのなら初めから言わなければ良いのに、と思ったのだがそれはあえて言わなかつた。

つまり、脳が火傷をしたんだよ。熱湯をかけられたと判断した脳が火傷を負つたんだ」

モスコミュール、と彼は付け加えた。

「極端な話、全ては脳が受信している現象のつなぎ合わせに過ぎない。お前の今知覚しているものの全ては、もしかしたら脳が誤って受信しているものかも知れないつてわけだ。脳が火傷しているみたいにな」

彼の前にグラスが一つ置かれた。しかし彼は口を付けようとせずに、ただ両手でそれを包み込むだけだった。

モスコミュールを温めているのか、自分の両手を冷やしているのか、もしくはその両方か。僕にはわからなかつた。もしかしたら、そのどちらでもないのかもしれない。

「例えば培養液で満たされた大きなビーカーの中に、脳が一つ浮かんでいるとしよう。眼球も、脊髄も何もついていない。丸裸の脳だけがそこにあつる。それには無数の電極が埋め込まれていて、そこから直接、色々なパターンの電気的刺激が送られている。目の前にあるカウンターの質感。座つている椅子の感触。飲んでいる酒の味。俺の話。そういつた事を表す電気的刺激が、その脳に直接送られているんだ。そうすればその脳は、まさか自分がビーカーの中に浮かんでいるなんて事に気付きもしないで、友の話に耳を傾けながらバーで酒を飲んでいる自分というものをその内面に構築し、それに従つて他の電気的刺激を処理していく」

なるほどねえ、と僕は間の抜けた感想を述べた。

その僕の反応が気に入らなかつたのか、それとも単にしゃべり疲れただけなのか、とにかく彼は大きなため息を漏らした。そしてグラスに口を付けた後、「相変わらず酷い味をしているな、こここの酒は」と呟いた。

力クテルなんてこんなものだろ。そう言おつとしたのだが、店員の目が気になつたのでやめておいた。

「もしかしたらこの世界に生きている人間全てが、ビーカーの中に浮かんでいる脳だけの存在なのかもしれないな」

その言葉で彼は、世界の真理を捉える受信機の存在という自らの仮説を締めくる。御静聴ありがとうございました、というわけだ。となると次に当然、質疑応答の時間が取られるはずだ。

僕はぐいっと酒を流し込み、のどのすべりを滑らかにしてそれに備えた。

「じゃあ、いつたい誰がそれを管理しているんだい。誰が僕達にそんな、夢を見せていいんだ。誰がこの世界に住む六十億もの人間の夢を紡いでいるんだ？」

少々酔いが回つてきたのか、僕は自分でも何を言つているのかわからないくらいにまくし立てる。しかし、彼は僕の問い合わせ取つてているようだつたので、さらに続ける事にした。

「人間の思考や行動なんて、そんなに単純なものじゃない。さらにそれらが複雑なネットワークを構築しているんだ。家族、友人、会社の同僚や上司、すれ違うだけの人々。そういう人と、多かれ少なかれ影響し合つて暮らしているだろ」

彼は、時折うんうんとうなづく以外、微動だにしなかつた。

「それだけじゃない。例えば僕が今、こうして何気なく取つた行動が地球の裏側に住む人に影響を与える事になるかもしれない。別にそんなに遠い所じやなくたつて構わないさ。僕の行動は、僕が見た事も会つた事もない人にまで影響を与えてる。時間や距離なんてものには関係なくだ。具体的な例を挙げればキリがないけど、そういう事つてあり得るわけだよな？」

よくもこんなにすらすらと言葉が出てくるものだな。他人事のようにそう思った。どうやら予想以上に酒の回りが早いらしい。

だが、僕の口は動き続けた。

「じゃあ、いつたい誰がそんな複雑な物語を僕達に与えているんだ。誰が六十億の脳が入つたビー・カーに囮まれて、その一つ一つに物語の描かれた電気的刺激を送つているんだ?」

別に彼の話に異を唱えているわけじゃない。僕はただ、思つた事を率直に言つてみただけなのだ。

彼はゆっくりと目を閉じ、しばらくの間そつしていたが、やがてそのままこう答えた。

「神様、かな」

自嘲的な笑みを浮かべて、彼はモスコミコールを飲み干した。

かたかたかたとキー・ボードを叩く音だけが、部屋の中に響いていた。

もうとっくに正午は過ぎたはずだけど、まだ何も口にしていない。そういうえば、昼だけじゃなくて朝もまともに食べていないなあ。そんな事が頭の隅をかすめたが、僕は相変わらず忙しなく指を動かし続けている。それと同じくらいの速度で表示される英数字の羅列を瞳に映しながら。

かたかたかたかた。そんなふうにして僕は今日も、この試作型人工知能用アセンブロプログラムを立ち上げているのだった。

人工知能の開発に拍車がかかったのは、そんなに昔の事ではなかったはずだ。確か僕がこの大学に入つたばかりの頃は国からの開発援助金なんてものはなかつたから、ここ一、三年の事だろう。

なんでも現在世界を管理しているシステムの運営が、人間の持つ知能だけではどうも上手くいかなくなつてきたりしい。

まあ、無理もないだろう。どんなに優れた人であつても間違いは犯す。それは防ぎようのない事だ。しかし彼らの扱つているそのシステムは、どんなに小さなミスであろうとも致命傷になり得るよう

精密かつ脆弱なものなのだ。

そんなシステムだからこそ、この世界は完璧な秩序で包まれている。そしてその中で僕達は、いつ崩れてもおかしくないような揺りかごに揺られているのだ。

その事を解決するために国は、というより世界は、より完璧で絶対的な管理機構を欲している。その管理機構の中核に人間の代わりに置かれる予定となつているのが、人工知能というわけ。そして莫大な国家予算が、それに注ぎ込まれている。

まあ、そのおかげでこいつして高価な機材を好きなだけ使う事ができるのだけどね。

僕が今開発しているのは本物の人工知能ではない。というより、そもそも完全な人工知能などまだ誰も完成させてはいないのだ。世界中の科学者や技術者達が「まあ、とりあえずはこのぐらいかな」と的なものを作っているのが現状だから。

それでもやはり少しづつではあるが、漫画に出てくるようないわゆる人工知能というやつには近付きつつある。そして、僕も微力ながらその一端を担つていいというわけだ。

ふう、と僕が一息つくとそれに反応するようにして、ディスプレイにプログラムが正常に起動した事を示す文字列がせり上がりってきた。それを確認して、僕は三時間半ぶりに立ち上がったのだった。

このプログラムさえ起動してくれれば、あとは機械が全てやってくれる。僕はただ適当な時間を見計らつて、電子書籍をつかえドライブに差し込めば良いだけだ。

まさか、最初の準備にここまで時間のかかるものだとは思わなかつたな。まあ、今ではすいぶんと慣れてきたけどね。そんな事をぼやきながら、僕はコーヒーメーカーのスイッチを入れた。いつの豆かも確認せずに。

そもそも、人工知能とはいつたい何なのか。世界中の科学者達はまずそこから研究を始めた。

なぜそんな事を研究しているのか、僕にはさっぱりわからない。

人間の代わりになるコンピュータ。それが人工知能だ。そんな簡単な答えがすでに存在するにもかかわらず、しかし世界中のシンクタンクでは未だにその事を討論し続いているらしい。ずいぶんと暇な科学者達もいたものだ。

僕が現在開発している人工知能は、人間の知能が有する重要な働きの一つ『経験に基づく判断』の代わりとなるものだ。人間の持つ機能の、ほんの一部分。

そのシステムはいたつて単純なものとなつていて、何しろ僕の作つているものだからね。

質問を一つ入力する。するとあらかじめ覚えさせておいたデータの中から、質問に関連したものだけが抜粋される。それらのデータを質問と照らし合わせ、その結果により答えを返す。

たつたそれだけだ。たつたそれだけのシンプルなものなので、当然、いくつかの制約がかかつてしまう。

その最たるもののが、イエス・ノーでしか答えを返せない、という事だろう。

例えば、『アンドロイドは電気羊の夢を見るか』という質問を入力したとする。それに反応して、そいつは自分の中に蓄積される膨大な数のデータから『アンドロイド』『電気羊』『夢』といった項目を全てピックアップしていく。そして入力された質問と自分が拾つてきた項目とを照合して、その確率が五十パーセント以上ならイエス、以下ならノーと書かれたランプを点灯させるのだ。

ちなみに、実際にこの質問を入力したところ、イエスのランプが点灯した。中のプログラムを調べてみたら、その確率は五四・三パーセントとなつていたが。

このプログラム自体に、もうバグはないだろう。完成した、と言つても良いぐらいだ。だから、あとはこいつに様々な事を覚えさせていくだけ。現に今もこうして電子書籍を読ませている最中なわけだ。

それにしても、と僕はまづいコーヒーをすすりながら思った。

彼の言うとおり、この世界には確かに事なんてないのかもしれない。全ては現象の連続、それもひどく曖昧なものばかりだ。

この人工知能を作っていくにつれ、その思いは強まっていく。初めてその事に気が付いたのは、本当に偶然だった。僕はただ、それで遊んでいただけなのだ。

いい加減、プログラムのバグ取りなんて作業に飽きてきた僕は、とにかくだらない質問を入力しては、その回答と確率を見て楽しんでいた。そしてそのうち、いかに百パーセントに近い確率で回答を出せるか、という事に没頭していったのだ。

今日の天気は良いか。イエス。五八・四パーセント。

空は雲一つない青空。しかし、天気なんて不確かなものでは数字は上がらないようだ。ではこれならばどうか。

僕は男か。イエス。五三・一パーセント。

はて、と思った。こいつには僕の経歴や身体的特徴は全て入力してあるし、男というものが何であるかという生物学と心理学の面から見た学術論文も読ませたはずだ。にも関わらず、その確率は半分ちょっととのなのである。逆を言えば、僕が実は女だったという不確定の要素は、無視できない確率でそこに存在しているという事になる。不確かな現象の連続。僕が男であるという不確かな現象の連続というわけだ。

うん。彼の話はやつぱり面白いよ。

そんな事を考えていたら、電子書籍のデータを全て読み込んだと いう事を表すブザーがブービーブービー鳴り始めた。続いて、データを項目ごとに整理するかどうかという選択肢が、ディスプレイに表示される。

僕はコーヒーカップを持つて いる右手の小指をうんと伸ばして、Yのキーを押した。

順調、順調。

そんな事を一人で呟きながら、僕はまことにコーヒーを一気に流し込んだ。

「まつたく、休みだつてのに、お前は相変わらずこんな陰気な所に籠もりっぱなしか。精が出るねえ……」

左手にコンビニの買い物袋をぶら下げながら、そいつはノックもせずに僕の研究室に入つて來た。

「自由研究みたいなものだからね。ほら、夏休みとかによくやつただろ」

僕が振り向きもせずに言つと、「夏休みの自由研究には国からの予算なんて降りねえよ」と彼は少し鼻で笑い、それから買い物袋の中身を一つ取り出して、僕の両手が忙しなく動いて横にそれを置いた。

「お前の所のは、飲めたものじやないからな」

汗をかいた缶コーヒーが一つ。後では、おそらく彼も同じものを飲んでいるのだろう。液体が勢い良く喉を駆け下りていく音が聞こえてくる。

「それにしても、何とかならないのかよ、この蒸し暑さは」
外ではセミが何匹か鳴いているようだが、彼はその事を言つてゐるのではない。この僕の研究室の温度について文句を言つてゐるのだ。

何しろ、部屋をぐるりと取り囲むコンピュータやら何やら全てに電源が入つてゐるのだ。冷房を付けていふとはいへ、確かにここでの気温は、外のそれとは比較にならない程高かった。

「で、悪の手先様は、今日はどんな悪巧みをしてるんだ?」

僕の肩越しにディスプレイを覗き込みながら、彼は言つた。

「相変わらずだよ。プログラムを立ち上げて、人工知能にいろんな事を覚えさせてるんだ。それより、何だよ悪の手先つて」

キーボードの実行キーを弾いてから、僕は缶コーヒーに手を伸ばした。

「世界を支配するための人工知能を開発してゐるんだろ? 世界を支配するのはな、神様か悪の組織つて決まってんだよ。お前は、神の

御使いなんて柄じゃないから、悪の手先だな。うん」

そういう事になるのかな、と僕は苦笑いを浮かべた。

「呑気な奴だな、お前も。……今じゃ、世界は完全な秩序の中にある。雑草すらも、その生える場所を定められているくらいだ。ぞつとするね」

雑草は、管理できていないから雑草って言つんじゃないのかな。そう言おうとしたけど、今の彼には何を言つても無駄だろ。それに返つてくる言葉もわかりきつている。

それなら、この世界にはもう雑草なんて存在しない、だ。

「僕は、良い事だと思うんだけどな。ほら、犯罪だつて激減したり、貧困に苦しむ人もいなくなつただろ。みんな、幸せに暮らしてゐるじゃないか」

「それを望まない連中もいる」

確かに、最近では自由革命なんて大仰なものを掲げて、各地で運動をしている団体もあるようだけど、そんなのはほんの一握だ。それに、そういう人達だってこの秩序の恩恵を受けて暮らしている。それはわかっていると思うんだけどな……。

彼は大きなため息を吐きながら、窓の外を見つめた。

「猫が良い例じゃないか」

「猫？ 今のは人間の話じゃなかつたのかい？ 猫がいつたいどうしたのさ」

驚いたというか、呆れたというか、とにかくそんなような表情を露骨に浮かべて、彼は僕の方に向き直つた。

「まさか、お前、知らないのか？ これだから、ニュースも見ない研究馬鹿は

「そんな大事件なのか。何があつたんだよ」

ここ一ヶ月程、僕は研究に没頭していて、まともにテレビも見ていない。そうしている間に、猫達にいつたい何があつたというのか。しかし、彼はすぐには話さず、もつたいたい振るようにして部屋の中をゆっくりと巡る。そして、また窓の近くまでやつて来た後、「絶

滅寸前だ」と一言だけ呟いた。

「絶滅!? なんでもまたそんな事に。猫達の生態だつてきちんと管理されているはずだろ」

「あいつら自身がそれを望まなかつたんだよ。……外にいた猫達は揃つて海や川に飛び込んだ。保護された猫達も、互いの喉元に喰らい付いて仲良くね。そういう相手がいなくなつたら、最後は餌を食べずに餓死するのぞ」

彼は台本の台詞を棒読みするように、淡々と事実を述べた。わかつてゐる。こういう時の彼は、抜群に機嫌が悪いから、僕は言葉を選ばなくてはならない。

「……支配されたり管理されたりする事を拒んだつて事なのかい? 自由を奪われるくらいなら、自ら死を選ぶ。そして猫達は実際に行動を起こした、とそういう事なのかい?」

僕に背中を向けたまま、彼は小さく「そうだ」と呟いた。どうやら、これ以上彼の機嫌を損ねずに済んだらしい。僕はほつと一息ついて、次にかけるべき言葉を探していった。しかし彼はそれを待たずに、何かに弾かれたように振り返った。

「それだけじゃなかつたのかもしれない。……」

彼の目は、僕の方を見てはいるけれど、僕を見てはいない。

そんな驚愕と困惑の表情で、何事かをぶつぶつと呟きながら考え込んでいる彼は、まるで何かに取り憑かれたみたいだ。

「それだけって、猫達が自殺した原因はそれだけじゃないっていうのか」

僕の発した言葉も無視して、そうなのか、とか、あり得るな、とか意味のわからない事を口から漏らし続けている。

駄目だな、こりや。しばらく、このまま放つておいた方が良さそうだ。

「逃げ出したんだよ」

それも、垂れ流しになつてゐる独り言なのだろうと思つたが、彼はまっすぐに僕の方を見つめていた。

逃げ出したんだ。僕に向かって、そのままもう一度繰り返す。そ

れでようやく、その言葉が僕に対して放たれたものだと気が付いた。「いつたい、何から逃げる必要があつたんだい。この世界の管理体制から？ それだと、最初の理由と同じじじゃないか」「違う。……危機回避本能つてやつさ。地震なんかの天災の時に、動物が異常な行動を取つたりするだろ？ あれだ」「あれだ、と言われてもなあ。

確かに、動物達にはそういう危険予知能力のようなものがあると本で読んだ事があるけれど、今回の猫達の集団自殺もその一種なのだろうか。しかし、そうだとしたら彼らはなぜ死ななくてはならなかつたのだろう。

「あいつらは気付いてたんだ。だから、この世界から逃げ出した。この世界そのものからだ。……まったくたいした奴らじやないか。人間様より先に、その事に気が付くなんてな」

何を言いたいのか、さっぱりわからなかつた。

それなのに、彼はいつものように一人で納得して、僕の研究室を出て行こうとしているのだ。

「ちょっと待てよ」

全然納得のいかない僕は、ギリギリのところで彼を呼び止める。「僕にもわかるように説明してくれないか」

彼はほんの少しだけ考えた後、微かな苦笑いを浮かべた。

「今、それを説明する事は何の意味も成さない。だけど、いずれお前にもわかる時が来る。何が正しくて、何が間違つていたのか。そして何が起こつたのかもな。その時には全てがわかる」

まるで謎かけだ。僕の頭の中は、ますます混乱していくばかり。

彼は、そんな間の抜けた顔をした僕から視線を外して、静かに部屋を出て行つた。

「どんなにあがいても、人間は神にはなれないよ」

彼が最後に残していった言葉は、この謎かけのヒントだったのか。それとも、彼が彼自身に宛てた言葉だったのか。

僕はまだ、何一つ理解できぬいでいた。

僕の目の前に置かれている装置。昔のSF映画に出てくるような、配線がごちゃごちゃと付いているヘッドギアと、それにつながれた一台のコンピュータ。

これが人工知能を開発するための最新設備だそうだ。小さな家が一軒建つほどの代物だが、国からの予算があるので、あっけなく購入できた。まったくお金つていうのは、あるところにはあるらしい。

『バーチャル・ブレイン』というのだそうだよ、これ。

開発のきっかけとなつたのは、人工知能に関する会議での事だつた。

何もないところから知能と呼べるものを作成するのではなく、最初から人間の脳みそを使えば良いじゃないか、という事を科学者の誰かが提言したらしい。そうしたら、基本的な知能はすでに出来上がっているわけだし、空き容量だつて腐るほどあるのだから、そこにデータを詰め込めば簡単じゃないか、というわけ。

だけど、この提言は当然のように他の科学者達の反感を買つた。非人道的だ、というのがその主な理由。

死んだ人間の脳みそは鮮度が悪くて使えないから、生きている人間の脳を摘出しなければならないだろ。当然これは却下だな。だからとて、最初から人工知能に使うために子供を産むというのもいかがなものかねえ。そういうわけにもいかないだろ、君い。人権擁護団体から圧力がかかるよ。そうなつたら、この研究もお終いだと思うのだがねえ。

そういう科学者が、会議の出席者の大半を占めていたのだつた。そんな話を何日も何日も繰り返していたらしい。そして出た結論が、人工知能用の人間の脳みそを作つてしまつ、というものだつた。そして開発されたのが、この『バーチャル・ブレイン』だ。

脳みそとは言つても、突き詰めていけばそれは結局、原子や分子、電荷の塊に過ぎない。だからその原子や分子、電荷の状態をコンピ

コンピュータの中に完全に「コピー」してしまえば、そこに一つの脳みそが存在する事になるだろう、と。

脳が司っている感情や思考、記憶といったものも、全ては微弱な電気信号なのだ。だから、それらの基本的な流れのパターンさえ完全に再現できれば、それは知能と呼ばれるに相応しいものになるだろう、というわけだ。

なるほどねえ、と彼はさして興味もなさそうに相槌を打つた。

面白そうなものを入手したらしいな、と言つて訪ねて来たから、人が懇切丁寧に説明してやつたのに、なんともつまらない反応じやないか。

「……ま、こんなとこかな」

仕方がないので、僕もつまらなさうに締め括つてやつた。すると彼は少し不思議そうな顔をして僕に尋ねた。

「研究の方向を変えたのか？」

「え？ いや、見ての通り、相変わらず人工知能の研究をしているけど……」

彼の不思議そうな表情が、ぐるりと呆れ顔に変わる。

「そうじやない。お前が研究していたのは人工知能全般の事じやなくて、経験に基づく判断つてやつだろ？ それはどうなつたんだ？」

「この装置が何かの役に立つのか？」

「当然」

僕は胸を張つてそう答えた。

「この装置の良い所はね、コンピュータの中に再現した脳みそを自由に動かせるつて事なんだ。だから、その脳みそから全ての情報を引き出せば、本を何冊も読ませるよりも沢山の情報を得られる。生まれてから現在に至るまでの、全ての経験がそこに蓄積されているわけだからね。それにその情報つてやつは、本や新聞に書かれている表面的な情報じやなくて、人間が自分の内面で処理するような、もっとリアルな情報なんだよ」

どうだ、と得意満面の顔で彼を直視してやつたが、彼は少し考え

る様な素振りを見せた後、ふうん、と言咳いただけだった。本当に説明しがいのない奴だよ、まったく。

「それより、どうだい？ 君もこの装置を体験してみないか？」

彼に体験させる、というよりは一人でも多くの人から情報を集めたい、というのが本音だったのだが、そんな事を言つたら彼は実験台扱いされた事に腹を立てかねない。

「俺の脳みその「コピー」を、コンピュータの中に作るのか？ そんな事をして何になる。そんな不得体の知れないものに協力するつもりはないね。俺は、今ここに存在する俺だけだ。それ以上でも、以下でもない」

「言い方以前の問題だつたようだ。

「それに、それじゃまるで、ビーカーに浮かべられた脳みそじゃないか」

それは以前、彼が酔つた時に口にしたものだつた。相変わらず、どんなに酔つっていても記憶だけははつきりしているらしい。

「ビーカーの脳みそ……か」

かなりお気に入りのその話題については、その後も僕なりに色々と考えてはいた。良い機会だと思つたので、僕は自分のまとめた考えを彼に述べてみた。

「それってさ、人間の脳みそじやなきや駄目なのかな？ 僕達の脳みそがビーカーの中に浮かんでいて、そこに入つてくる情報、例えば僕の見ている全ては電気信号つて事でしょ？」

「そういう事になるな」

「じゃあ、ビーカーに浮かんでいるのは人間の脳みそじやなくて仮に猫としようか。で、僕達はその猫に「」えられている電気信号の一つに過ぎないつていうのはどうだろ？ それでもこの世界は成り立つと思うのだけど」

彼はそこで急に重いため息を吐き出して、僕を見据えた。

「「ずいぶんと寂しい事を言つんだな。確かにその可能性も無いわけではない。それに、その方が俺達のような複雑なネットワークを管

理するよりも余程楽な作業だ。神様だつて手抜きぐらいしたいだろうからな。だけど……」

「だけど?」

一瞬、話し続ける事を躊躇したようにも見えたが、僕があまりにも興味深そうに聞いたもんだから、彼は今にもかすれで消えてしまった小さな小さな声で続けた。

「俺は、今ここに俺が存在していると信じている。周囲にある脳みそが全て猫のものだつたとしても、俺だけは間違いなくそこにいる。例え俺が何の成果も挙げられずに、今ここで、死を目前にしていうともだ」

彼は窓の枠に両手を置き、その外にあるものの、さらにも遠くを見つめた。

「……やつぱり、駄目なのかい?」

そのままの姿勢で、小さく「ああ」とだけ呟いた彼の背中は、微かに震えているようにも見えた。

「原因も不明。治療法ももちろん皆無。まあ、生まれた時からわかつていた事だからな。よく、ここまで来られたと思うよ」

科学も医学も薬学も、常に進歩を続けてきた。数十年前までは死を待つより他なかつた病でさえ、今では薬一つで治せる。しかし病魔つて奴は、手を変え品を変え、未だに人間を苦しめ続けている。

そして彼もまた、その苦しみを受けている一人なのだ。

「まあ、いいさ。俺の事は良いんだ。研究の邪魔をして悪かつたな」

彼は部屋を出て行こうとして振り向いた。

いや、僕はその時確かに彼の背中がドアの向こうに消えるのを見たような気がしたのだが、一瞬のノイズの後、既に行つてしまつたはずの彼が僕の目の前でくるりときびすを返したのだ。

不思議そうに見つめる僕に向かって、さつきと同じ人物とは思えない程の力のある声で彼は言った。

「信じ続けるよ。お前が、今そこにいるという真実を。その事だけは、決してあきらめるな

僕はしつかりと頷いて、とても小さく見える彼の背中を見送った。

そこは、真っ白な部屋だつた。

カーテンも壁もベッドも、その横に置いてある小さな棚も、何もかもが白で統一されている部屋だ。そう、彼の着ている服でさえ。

。

「やあ

僕がその部屋に入った時、彼はテレビを見ていた。この部屋で唯一、色のある物だ。

画面から溢れるそれは勿論の事、それ自体が薄いグレーをしている。ただ、テレビの台は他のものと同じく白なので、それだけがぽかんとそこに浮かんでいるみたいだつた。真っ白な世界に浮かぶ、色とりどりの小さな箱。

彼は僕の声に反応してブラウン管から眼を離すと、僕の方を見て、そのやつれた顔の口元をほこりばせる。

「ずいぶん元気そうじやないか。……安心したよ」

僕はそう言いながら、ベッドの横にある棚の上に、お見舞い用に持つてきたフルーツの籠を置いた。

「今、ニュースを見ていたんだ。俺はお前と違つて、世の中の趨勢をしつかりと見つめる事にしているからな」

ブラウン管に眼を向けると、女性アナウンサーが何かの記事を淡々と読み上げている最中だつた。ボリュームがかなり絞られているので少々聞き取りづらかったが、時折、人工知能とか開発予算とかシンクタンクとか、聞き慣れた言葉が耳に入つてくる。どうやら、僕が研究している事に関連した記事らしい。

「やばい事になつてきたな……」

彼は僕と同じようにブラウン管を見つめながら、それに向かって呟いた。そして、その後に大きなため息を一つこぼす。

「どうかしたのかい？ 人工知能の開発で、何か良くない事でも？」

彼が枕元に置いてあつたテレビのリモコンを手に取り、その大き

な赤いボタンを押すと、ブラウン管は一瞬で暗闇に転じる。色彩も音も、電子の彼方に消えてしまった。

「お前、どうして人工知能の開発が必要か知っているか？」

「世界を絶対的に管理するためだろ？ それぐらいは知っている

「世界を絶対的に管理するためだろ？ それぐらいは知っている
や」

僕が不機嫌そうに答えると、彼は「その回答じゃ、満点はもうえ
ないな」と少し笑った。

「世界を絶対的に管理すると簡単に言つが、実際に何をどう管理す
るのかわかつてているのか？」

彼が続けざまにそう尋ねてきたので、僕は口を濁してしまった。

僕の知識は、思つていた以上に適当なものだったらしい。

しばらく考え込んでいた、彼は、仕方がないと言わんばかりの
顔で説明を始めた。

「 時間を管理するのさ。タイムスケジュール、といつ意味じや
ないぞ、この場合の時間というのは。俺達や俺達の周りにあるもの
を動かしていふ、時間という概念そのものをコントロールしようと
してゐるんだ」

「そんな事が……」

「まあ、技術そのものはまだ完成していないがな。理論的には可能
だそうだ」

僕は、そなのかあ、とか、なるほどねえ、とかそういう意味の
言葉を呴いた。しかし、そこでふと思つ付く。いつたい、それで何
がやばい事になつてきたのか。

「それで、何か困つた事でも？」

彼は一瞬、ひどく辛そうな表情を見せたが、それでもその口は動
き始めた。

「お前、時間を長く感じたり、短く感じたりする事があるだろ？」

「お前だけじゃない。俺だってそう感じる時はあるし、誰もがそ
うだろ？ そんな、人間の持つ相対的な時間感覚で、この世界に

流れる時間そのものを完全に管理できると思うか？」

首を横に振る僕を見届けてから、彼は続きを話し始める。

「そのための人工知能なんだよ。ありとあらゆる知識を保有し、なつかつ相対的な感覚で物事を判断したりしない。その絶対的な感覚をもつて、時間を管理する役割を与えるとしているんだ」

時間を管理する脳みそ、か。確かに人間にはできない仕事だ。

「しかしながら、少々その開発に時間がかかり過ぎたんだ。……コストも。だから世界の管理人達は、人工知能の完成を待たずに、人間そのものを使ってそのシステムを起動し始めようと……」

そこまで言つたあと、彼は大きく咳き込んだ。僕は慌てて背中をさすつたが、彼の顔は見る見るうちに青くなつていいく。

「どうやら、長居し過ぎたみたいだね。もう帰るから、ゆつくり休んで」

発作が収まってきたので、彼をベッドに寝かせ、僕はその場を立ち去ろうとした。

また、来るから。そう言つてドアノブに手をかける。

「……頼みがあるんだ」

かすれて、今にも消えてしまいそうな声が背中に届いた。僕はドアノブに手をかけたまま振り返る。

「俺の……俺の脳みそのコピーを取ってくれないか？」

はじめ、何の事を言つているのかわからなかつたが、しばらく考えた後、以前彼が酷評したあの装置の事を言つてゐるのだと気付いた。

「バーチャル・ブレインで、君の脳を「コピー」するつて事？ どうして。前に説明した時には、あんなに嫌がつていたじゃないか

思わず言い方がきつくなつてしまつたが、彼は少し恥ずかしそうにうつむいた後、ぽつりぽつりと話し始めた。

「……怖いんだ。この世界から、俺という存在が消えてなくなつてしまつた事が。だから俺は、どんな形でも、どんな破片でもいいから、残しておきたいんだ。俺という存在そのものを」

どんどん小さくなつていいく彼の声。まるで、母親に咎められた子供みたいだつた。このまま放つておけば、彼自身も小さく小さく消えてしまつかもしれない。そうなつてしまつ前に、僕は「わかつた」とだけ答えた。

「すまない。外出許可が取れたら連絡するよ」

準備しておく。そう言つて再び彼に背を向け、そのドアを閉めた。

「……そういう事か

僕のすぐ後ろでたたずむ真つ白なドアに体を預け、そう小さくもくべくもらした。

つまり、それが死ぬつていう事……。自分のプライドや信条なんか捨ててでも、何かを、たつた一つでもいいから、何か自分の生きた証を残したいと思う。

それが死ぬつていう事か。

どうしようもない悲しみと、どうしようもない怒りが同時にこみ上げてきて、震えが止まらなかつた。

その日の午前中に、彼から連絡があつた。外出許可が取れたので今から行く、準備を頼む、と。それだけ言つと、受話器はぶつりと音を立て、続けてツーザー喚きだした。

だから僕は、部屋にあるコンピュータの電源を全て入れ、バーチャル・ブレインの配線を確認した後、まずいコーヒーをすすりながら彼を待つたのだ。

「遅くなつてすまない。何度か休憩しながら来たものでね」

研究室に入つて来た彼の顔を見て、唖然としてしまつた。こけた頬に土氣色で乾ききつた肌。その中で両の目だけがやけにぎょぎょろと輝いているのだ。

色々と話したい事もあるのだけれど 急がなくては時間がない。
そう思つた。

部屋の真ん中に置いてある椅子に、彼が崩れ落ちるようにして腰掛ける。そのままさらに崩れてしまわないので確認してから、ヘッ

ドギアを彼の頭に被せた。口から下しか見えないその顔は、苦しそうに不規則な呼吸を繰り返している。

「重たいだらうけど、そんなに時間はかかるないから、我慢して欲しい」

「そう言つて、がちやり、と音を立ててヘッドギアが小さく頷いた。配線のつながつたディスプレイに、実行とかキャンセルなどといった無機質な表示が明滅している。僕は実行にカーソルを合わせて、キーボードのエンターキーを弾く。それから数秒遅れて、ヘッドギアがぶんぶんと蠅の飛び回るよつた音を発し始めた。

「これ、会話はできるのか?」

本当はなるべく何も考えないようにするのが一番良いのだけれど、それだと、そのまま彼が逝つてしまいそうな気がしたので、大丈夫だよ、と一言だけ答えた。まあ、いつもより多少時間がかかるぐらいで、精度その他に影響はないだらう。

それに、こりこりしている間くらいしか、彼と話ができる時間もないはずだから。

「もう、時間がないんだ……」

彼は小さく呟いた。おそらく、それは彼自身の事を言つてているのだろう。自分の体は、自分が一番よく知つていて。つまり、自分にあとどのくらい時間が残されているのかを 知つていて。

しかし、僕はそんなものを認めたくはなかった。そんな弱気な彼を、認めるわけにはいかなかつた。

「そんな事言つなよ。あきらめるなよ。まだ、やりたい事だつて、やらなきやならない事だつて、たくさん残つてゐるだらう? それも全部手放してしまつつもりかい」

ヘッドギアは驚いたようにこちらを向くと、その内側から、小さな笑い声を漏らした。

「違うよ。今言つたのは俺の事じゃない。……まあ確かに、俺にももう時間はないけどな。だけど、俺がお前に伝えなきやいけないのは、その事じゃないんだ」

彼は少し苦しそうな呼吸を整えてから、ぽつりぽつりと話し始めた。

「一週間後だ。今からちょうど一週間後に、人の脳を使つた、大々的な時間管理システムの実験が開始される」

「前に病院で言つていた、人工知能が間に合わないからつていうやつの事かい？」

「がちやり。

「上手くいくと思うか？　俺はそうは思わないね。人間の相対的時間感覚じや、到底無理な仕事さ。実験は失敗に終わる……。その瞬間、何もかもが終わりだ」

「どうなるんだい？」

「バラバラだ。時間や空間といった概念そのものが崩壊し、この宇宙は再構築不可能なまでに破壊される。この世に存在する全てのものは、その物理的なエネルギーを失い、最も小さな粒子、つまり量子状態にまで分解してしまう。混沌の海、かな」

「そんな……」

「信じられないか？　だが、これは紛れもない現実だ。無数にある可能性の中から、その最悪の結末を選んだんだよ。人類自身がな」
僕は言葉を失つてしまつた。彼は、いつも小難しい科学的理論を交えた冗談を言つたりするが、自分に残された時間が少ない事を知つてゐる。決して必要な事を言つたりはしないし、他を道連れにしたいと願う呪詛の言葉を吐いたりはしない。長い付き合いだ。それぐらいはわかる。

彼は、自分の持つ知識から想定する未来を、あくまでも現実的に述べたのだ。

「一週間後、世界は終わりを迎える……？」

僕の問いに答えたのは、彼ではなく、脳の「ピー」の終了を告げるブザーだった。

彼は自らの手でヘッドギアを外すと、ふらふらと立ち上がつた。

「ま、そういう事だ。俺の予想が外れる事を、心から願つてるよ

そう言つて、部屋のドアに手をかけた彼は、その場で一度つづく
また。

「心配だから、病院まで送つていくれよ」

彼はそのままの姿勢で首を横に振つた。大丈夫だから、と。

「大丈夫なわけないじゃないか。椅子からドアまで行くのにもやつ
となくせして」

彼を立たせ、肩を抱えるよつこして、もう一度「送つていくれよ」
と言つた。

「いい。来なくて、いい……」

彼の真つ青な額に脂汗が浮いている。

「何言つてるんだよ、そんなつらそうな顔して！」

「いいつて！……見せられるわけないだろ？お前に、あの時の、
その瞬間なんか」

まっすぐで真剣な眼差しに打たれた僕は、そのまま何も言い返す
事ができず、ただ去つて行く彼の背中を黙つて見送るだけだった。
どうしたら良いのかもわからず、バーチャル・ブレインもほつた
らかしで、僕は机に突つ伏して頭を抱えていた。

世界の崩壊。死を目前にした彼。どちらも僕には重過ぎる……。
どうしたら……。

そんな、答えの見つからない問題に埋まつてしまつた僕を引きず
り出したのは、それから二十分程経つた頃の、一本の電話だった。
ビヨウインノマエデ、タオレテイルカレヲミツケタ。モウ、シン
ゾウハトマツティタ。

意味のわからない事を喚いている受話器をその場に放り出し、僕
は部屋を飛び出した。

「見せられるわけないだろ？お前に、あの時の、その瞬間なんか

「

その連絡が来たのは、彼の葬儀が終わつた翌日の事だった。

なんでも、国は人工知能開発に関する一切のプロジェクトから手

を引くというのだ。何の成果も上げず、巨額の損失だけを残して。で、その損失を少しでも減らすために、国からの出資を利用して買った研究設備やその他の備品などはすべて売却し、そのお金を国に払え、というのだった。

ずいぶんと勝手な話だな。そつは思ったのだが、僕自身、何の成果も上げられなかつた研究者の一人なのだ。あまり大きな事を言えるような立場ではないだろう。そう思い、買取業者に連絡を取り、僕は研究所にあるコンピュータをつないでいるケーブルを一つずつ外していくのだった。

ふと気が付くと、バーチャル・ブレインにつながれているディスプレイが何事かをちかちかと点滅させている。

『作成したバーチャル・ブレインから情報を引き出し、データを項目ごとに並べ替えますか?』

ああ、そうか。三日間、このままほつたらかしだったんだな。彼の脳の「ペー」を取つたあの時から。

僕はそのすぐ下にあるキーボードに歩み寄り、「Z」のキーを押した。すると、すぐさま「ディスプレイには、『では、作成したバーチャル・ブレインをこのままの状態で保存し、終了します』との文字がせり上がってきて、しばらくぶんぶんわめいたあと、しうんと電源が自動的に落ちた。

これで良かつたのだと思う。

彼の残したかつたものは、決して頭の中に詰まつてている情報などではなかつたはずだ。彼は、より完全な形で『自己』というものを保存しておきたかつたからこそ、この僕に脳の「ペー」を頼んだのだ。僕は、そう思う事にした。

やがて、僕の周りを様々な色、様々な長さのコードを触手のようにならして機械達が埋め尽くした。明日になれば、これらの全てを買取業者が持つて行つてくれるはずだ。

残るのは、飾り気のない事務机と、その上に置かれている僕のノートパソコン。そして、僕の手の上にある小さなメモリー チップだ

け。

これを買った時にもその小ささに驚いたが、今こいつして見ても、こいつは本当にすごいものだと思つ。

何しろ、この僕の手に四つは収まるであつたその小さな黒い箱の中には、僕の研究データ全てと世界中の電子書籍、そして何人かの脳みそが詰まつてゐるのだ。

本当は、このメモリーチップも買取業者に渡さなければならぬのだが、そこまで最新型というわけでもない。おそらくは二、三千円で買い取られてしまうだらう。

彼は、そんなに安い男ぢやないや。

そう独り言を漏らして、僕は研究所を後にした。

行く場所は決まつている 時計屋で、目覚まし時計を買うんだ。

昔はよく、こいつやつて科学雑誌の付録で付いてきたラジオを作つたりしたつけな。

そんな事を思いながら僕は、先日までとは比べものにならないほど殺風景な研究室の片隅で、目覚まし時計を分解していった。

電池カバーから歯車へと伸びてゐる導線を真ん中で切断し、そこにメモリーチップをつなぐ。

こうすれば、電池から与えられた電気は、メモリーチップつまり彼の脳みそを経由して歯車へと伝えられる。いや、彼の脳みそだけじゃない。メモリーチップ内にある全ての情報を経由するのだ。これだけの情報量なら、世界そのものを経由すると言つても良いだらう。

そして、それらの情報が、この目覚まし時計の歯車を回すのだ。

なぜ、自分がこんな事をしようと思い付いたのかはわからなかつた。單なる気まぐれのような気もするし、何か明確な意図があるのかもしれない。ただ、自分の事だといつて、そうして客観的に感じてゐる僕が、少しおかしかつた。

だけど、そうだな……。

「いっなら、彼が入っているこの目覚まし時計なら、きっと絶対的な時間を刻んでくれるに違いない。」

そう思ったのだった。

もしかすると、彼の存在を残しておきたかったのは彼ではなく、他でもない僕自身だったのかもしれない。

そういうえば、あのラジオも彼と一緒に作ったんだよな。いらない、というのに無理矢理同じ雑誌を買わせて。面倒くさそうに作業している割には、僕の作ったそれよりも遙かに精度の良いものができたんだっけ。

彼は何でもできたし、何でも知っていた。それが鼻につく時もあつたが、それでも僕は彼に憧れていたんだ。

そうだな。彼を一番残しておきたかったのは、僕自身だ。だから、今もこうして意味の無い作業をしているのだろう。

メモリーチップが入った分、少し窮屈になつた目覚まし時計は、しかし、無理な力を加える事なく、かちりと裏蓋が閉じた。

まるで、それが本来の姿であるかのように、何の違和感もない。かちっ、かちっ、と迷いなく時を刻み続けるそれは、紛れもなく、世界で一番頭の良い目覚まし時計だ。

僕はそれを両手で握り締めると、少しだけ、泣いた。

どれくらいの間、そうしていただろう。

手の中にあるそれが、不意におかしなリズムを刻み始めたのだ。驚いて文字盤をのぞき込むが、針の動きにはなんの変化も見られない。

しかし、何かがおかしい。

どんなにのぞき込んで、壁にかけられた時計と比べてみても、そいつは単調に一秒ずつに針を動かしている。

だが、その間隔が長いような短いような、とにかく僕の知っている『一秒間』とは微妙にズれているような気がするのだ。

「始まつたようだな」

いきなり、後から男の声がした。

「そんな……」

驚いてそう言つのがやつとだつた僕を鼻で笑うと、その男は部屋をぐるりと見回し、「ずいぶんと殺風景になつたもんだな、ここも」などとそつけなく言い放つのだつた。

「おいおい、どうしたんだよ。まるで幽靈にでも出くわしたみたいな顔して」

椅子から半分だけ立ち上がつた姿勢で口を開けている僕を嘲笑うのは、間違いなく　彼だつた。

「だつて、君は一週間前に」

「死んだよ。確かに俺は死んだ。この世界では一週間前にな

「この世界では？」

彼は、まるで僕との会話そのものを楽しんでいるかのように、穏やかな笑みを浮かべながら話を続けた。

「そう、この世界では俺は一週間前に死んだ事になつていて。だけど、正確に言つならば、俺が死んだのは五十二年と四十八日前だ」事務机の上で天井を仰いでいる田覚まし時計をひょいと手に取り、彼はその文字盤を僕に向けた。

「まあ、もつともそれは俺の中にある時計が刻んだ時間だけだ。現実世界では、あれからどれぐらいの時間が流れたのかは見当も付かない。なにしろ、時間という概念そのものが吹き飛んでしまつたんだから」

何を言つてゐるのか、さっぱりわからなかつた。

それに、僕の目の前にいるこの男は、本当に彼なのだろうか。僕が最後に見た彼は、ぎりぎりのところで命にしがみ付いているような、目も当てられない姿だつたではないか。

しかし、今僕の目に映つてゐるのは、そんな事は微塵も感じさせないほどの凜とした姿だ。苦笑いを浮かべるのが精一杯だつたはずなのに、こんなにも穏やかな表情をしている。

「何だか、不満そうな顔をしてるな。せつかく一週間振りに会えたつてのに。……まあ、言いたい事は大体わかるけどな

「幽靈……なのか？」

僕が恐る恐る尋ねると、彼は一瞬困ったような表情を浮かべた。「科学者らしくない発言だな。まあ、違う、とも言い切れないけどな。確かに幽靈みたいなもんさ。俺も そしてお前も。この世界そのものが」

「わかるように説明し」

苛立ちからあげられた僕の声を止めたのは、突然の鳴動だつた。地面が揺れているのではない。空間そのものが大きく揺さぶられているような、奇妙な鳴動。

それはすぐに治まつたが、僕は事務机の足下に倒れ込んでいた。だが、彼は何事もなかつたかのように、平然とそこに立つていて。つかまる物も、そしてそんな時間的余裕もなかつたはずなのに。「最初に言つただろう。もう、始まつてしまつたんだよ。俺はその事を、そして全てをお前に説明するために来たんだ」

田の前にいるはずの彼が、ひどく遠くに見えた。しかし、それは目の錯覚とか、感覚的なものではない。何もかもが曖昧で、不安定になつていて。そんな気がした。

「俺は、『固定空間内における時間軸の暴走』と呼んでいる。詳しい事はわからないが、とにかく、この宇宙そのものが崩壊してしまつたんだよ」

「君が前に言つていた、時間を管理する実験の失敗つてやつか？」
「そうだ。そしてそれは、これから起つる未来でもあるし、五十年以上も前に起つた過去でもある」

僕は、彼の言葉どれ一つとして理解できずに、呆然と彼を見つめていた。

「……この世界は、俺が作り出したシミュレーションなんだよ。お前という存在は、有りもしない情報を与えられてそれを現実だと認識している、ビーカーの中の脳みそに過ぎないのさ」

「その話は、君が酔つた時にした作り話じゃないか」

彼は、窓枠に手をかけると、その景色一つ一つを目に焼き付ける

よつに、ゆつくつと眺めていた。やがて、血の罪を償ふるよつに、ぽつりぽつりと話し始める。

「宇宙が崩壊した時、そこに存在したものは全て量子化してしまった。物質として結び付くエネルギーを失つてしまつたんだ。だけど、存在そのものが消えてしまつたわけではない。認識できないほどにばらばらになつてしまつただけだ。だから俺は 目覚まし時計としてばらばらになつてしまつた俺は、その電子の海の中で、なんか宇宙を元通りに復元しようとしたんだ。それに必要な知識は、すでにお前によつて与えられていたからな。 色々な事を試したよ。だけど、どうやっても足りないものが一つあつた。それは真実と、それを復元するためのエネルギーだ」

再び、空間が揺れた。先程のそれよりも遙かに強く。

僕は事務机の脚にしがみ付いているのがやつとだとつうのに、彼は壁に垂直に走つたひびを田で追うと、何事もなかつたかのように、口を開く。

「まつたくもつて時間がかかつたよ。お前が読み込ませた歴史書や科学書なんかを元に、この宇宙を一から再現したんだ。ビッグバンから、最後の『固定空間内における時間軸の暴走』まで。今まで宇宙が歩んできた歴史を、そつくりそのまま俺の中で再現したのさ。まあ、完璧とは言えないけどな。それが、今お前のいるこの世界だ

「いつたい、何のためにそんな事を」

「さつきも言つただろ。必要なのは真実と、それを復元するためのエネルギーだ。宇宙を一から再現する事によつて、そこにある真実の情報を取り出す。そして、最後の『固定空間内における時間軸の暴走』の際に生じる膨大なエネルギーを利用して、このバラバラになつてしまつた宇宙の隅々にまで、真実の情報をばらまくのさ。…夢を見させるんだよ、この宇宙に。本来の姿を夢として『』える事によつて、本来の姿で田を覚ませるんだ」

揺れは收まらない。それどころか、震源がどんどん近付いてきている感じがする。

「じゃあ、僕が今まで自分として認識していたのは……。君と話をしたり、人工知能の研究をしたり、君が死んでしまったあと昔の事を思い出したりしたのも、全てただのデータの寄せ集めだって言つのか?」「

叫んでいた。地鳴りや不可解なノイズのせいで、自分の声もよく聞こえなくなつていて。彼を問い合わせるように、自分自身の存在をこの場に貼り付けておくように、僕は叫んでいた。

「お前、バー・チャル・ブレインを買った時にまず自分で試しただろ?」

「そりやあ、いきなり他人で試すわけにはいかないから、まずは自分が実験台になつたさ」

「そして、そのデータを項目ごとに整理して保存した。……正直言うとな、それが一番大変な作業だつたんだ。ありとあらゆるデータの中から、お前の欠片を拾い集めて再構築する事が。もしかすると余分なデータが入つていて、足りないデータがあるかもしれないが、ほぼ百パーセントお前はお前だよ」

今ここにいる僕は、その昔存在した僕という人間の断片の寄せ集め。

出来損ないの悪い冗談みたいで、吐き気がした。

「……誰かに伝えたかったんだ。せっかく死ぬ直前に自分自身を残したつてのに、何もかもが電子の海の中。おそらく、その中で自我のようなものを保てたのは俺だけだろう。俺はそれが起こる前から、電子の海の中 この目覚まし時計の中に浮かんでいたからな。だけど、それはあまりにも寂しすぎた。だから誰かに お前に伝えたかったんだ。全てを」

「そんなの、勝手すぎるじゃないか。勝手に僕を再生して、勝手に宇宙を元通りにして。宇宙に夢を見させるだつて? そんな、誰かの夢の中でしか生きられないなら、僕はこのままでいい」

彼は驚いたように両の目を大きく見開くと、悲しそうにそれをゆっくりと閉じ、僕に背を向けた。

「お前は忘れてしまったのか？ どんな形でもいいから自分を残しておきたかった俺の事を。誰かに見られている夢にすらなれなかつた俺の」

ノイズと地鳴りが彼の声を搔き消した。同時に床と壁が波打ち、僕と僕のつかまっていた事務机が宙に放り投げられる。

床と壁には、波打ったところを追うようにして亀裂が走り、その亀裂も空間ごと瓦解していく。

「もう、時間がないんだ！」

上も下も、右も左もわからなくなつた滅茶苦茶な部屋の中心で、彼だけがぼんやりと空間に浮かび、声を張り上げていた。

「誰かに見られている夢でも良いじゃないか！ お前は、もう一度お前を生きてくれ！」

空間が、悲鳴を上げながら膨張と収縮を繰り返す。その動きに耐えられなくなつた部分から順に、碎け散つていく。

もう、ここが僕の使つていた研究室である面影すらじどめてはない。

「君はどうするんだ？ 君も、もう一度やり直せるんじゃないのか？」

体が細かく溶けていきそうなのを必死でこらえながら、僕は叫んだ。

だけど彼は、少し嬉しそうに微笑んだだけで、そこから動こうとはしなかつた。

「まだ、最後の仕上げが残つてゐるからな。それに、俺はとつぶく死んでるんだ。もう、そつちには行けないわ」

笑いながら、彼の瞳からは涙が溢れていた。

もう、辺りには何も見えない。何もない場所に彼だけが立つて、そしてどんどん遠ざかつて行く。

いや、僕の方がこの世界からはじき出されようとしているのだ。

彼の作り上げた偽物の夢から、宇宙が見る本物の夢へと。

「忘れるんじゃないぞ！ たとえそれが誰かに見られている夢だと

しても、信じ続けるんだ！ 今、お前がそこにいるといつも真実を…

どこか遠くから、目覚まし時計のベルが聞こえてくる。

僕はしつかりとうなずいて、彼が見えなくなるまで、何もかもが

消え去ってしまうまで、手を振り続けた。

彼に、そしてこの世界に 。

やかましい音がするなあ、と思つて目を覚ますと、なんて事はない、僕は目覚まし時計を抱えたまま事務机に突つ伏していたのだつた。

ゆつくりと体を起こして周りを見渡すと、いつも通りの僕の研究室。つい先日から、ずいぶんと殺風景になってしまってはいるけれど。

「ずいぶんと、長い夢を見ていたんだなあ

誰にともなくそつそつと、僕は、僕の両手に抱えられている

そいつを見つめた。

いや、僕が夢を見ていたんじゃない。僕が彼の夢に見られていたんだ。

目覚まし時計の見る夢。

手のひらに、けたたましく鳴り響くベルの振動が伝わってくる。それは、全ての始まりを告げる開幕のブザーのように。

危険を知らせる非常ベルのように。

そして、ひと夏しか生きられないと知りながらも、力の限り叫び続けるあの蝉のように。

いつまでも、いつまでも鳴り響いていた。

夢に見られるというのも、これでなかなか楽な事ではないなあ。

そんな事を考えながら、目覚まし時計を強く握り締める。涙が、止まらなかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6794a/>

目覚まし時計の見る夢

2010年10月8日15時30分発行